

カリフォルニア滞在記(二)

— ミルズへ行く —

岩立 京子

カリフォルニアに来て二週間、私たちが新たな生活や学校への適応という目の前の課題解決に奔走している頃、アメリカ南東部をハリケーン「カトリーナ」が襲い、ルイジアナ、アラバマ、ミシシッピなどを含む多くの州が甚大な被害を被っていました。新聞やニュースは悲惨な被害状況を日々報道し、その後、各地で救援活動が展開され始めました。娘が通う公立小学校でもベニー募金やフードドライブ(缶詰を集めて困窮者に送る)が、高校ではカーウォッシュ(寄付するお金を稼ぐために校庭で

洗車する)がさかんに行われ、子どもたちも一人の市民として活動することによって、社会貢献の意味を学んでいくように思いました。こちらでは日常的にポランテイアや寄付が募られ、公立小学校ではノート、ボールペン、ティッシュペーパーから子どもたちのスナックのためのポップコーン、クラッカー(教室に電子レンジが置いてあり、テレビを見る時などに食べる)、使い古しの携帯電話や機械類までいつでも寄付を歓迎するということがありました。いつでもどこからでも集められるだけの資源を集

めて利用することによって、新たなものを生み出した
り、不可能を可能にしていく積極さは大いに見習いたい
と思います。

いよいよ明日はミルズに行く日。こちらに来た当初、
ミルズ大学教育学科長のジェインや助手のアニーと電子
メールでアポを取っていました。約束した日を前に
「自己紹介はすらすらとできるか」「ミルズでの活動の
目的などを伝えられるか」「相手の言うことをちゃんと
聞き取れるか」「バスや電車に乗れるか」など、日本で
は考えられないようなことに不安を覚えました。

こちらに来てまず感じたのは英語でのコミュニケーションの難しさです。ヒアリングについていえば、スパニッシュ系、チャイニーズ系の人によって発音も話し方も違うし、さらに、当たり前のことですが百人の人がいれば百通りの個性的な表現をします。ですから、単語の典型的な発音だけ聞き取れば良いということではなく、ある範囲内の発音のヴァリエーションを同一単語として聞き取る必要があるということです。また、文法的

に整っていない日常の雑談のような話は聞き取りにくく、ヒアリングの力不足を痛感していました。その夜は渡米の目的を英文で書いたものを読み返したり、交通手段や時刻表、地図などを点検したり、自己紹介の内容を頭のなかで繰り返し返したりして興奮していたせいか、なかなか寝つけませんでした。

いざ、ミルズへ！

サンフランシスコの街は道路がほぼ碁盤の目のように整っており、muniという市電や市バス、ケーブルカーが縦横に走っています。「アメリカでは車がないと生きていけない」とよくいわれますが、サンフランシスコはmuniや近郊電車のBARTをうまく乗り継げばほとんどどこへも行けます。私が住むサンフランシスコからオークランドのミルズ大学まではmuniやBART、大学のシャトルバスを乗り継いで少なくとも一時間半、一時間一本しかないシャトルに乗り遅れると二時間半はかかります。午後一時にジェインの研究室で会う約束をし

ましたが、その前にアニーの部屋に立ちより事務手続きをする必要があると思ひ、その朝は八時に家を出ました。

ミルズへの初めての訪問は緊張の連続でした！ まず、苦勞したのがバス。このバスは乗客が停留所に一人もいなくて、その停留所で降りる人がいない（バス内にある紐を引かない）と通過してしまいます。また、バス停は目印となる標識一本すら立っていず、道路に黄色の停止線とバスの番号が書いてあるだけのところも多く、慣れない者にとっては悲しいかな、バスを降りること、ただそれだけに緊張を強いられたのでした。また、運転手によつては、停留所でなくても紐を引くと止まって降ろしてくれるので、紐を引くタイミングも難しい！ その日は、早めに紐を引いたらバスが止まってしまい、あわてて「私が降りたいのは次の駅よ」と伝えました。miniの時刻表は全然当てにならず、四十分ぐらい全く電車が来ないし、BARTへの乗り換えもスムーズにいかず、結局、予定していたシャトルに乗れる時間に目的地

には着けませんでした。

時間は十分にあるので、シャトルのバス停を確認してからカフェで温かいカフェオレをたのむと店員が紙コップだけをくれました。私が思わず「何これ？」と聞くと、「コーヒーはセルフサービスだから自分の好きなだけ入れれば、あとは僕がカップいっぱいまでミルクを入れるよ」と言われ、なるほどと妙に感心してしまいました。

ミルズの学生らしき女性たちと一緒にしばらくシャトルを待っていると、ホームページで見慣れたバスの姿が現れました。「これがあのバスだ！ これに乗ればミルズに行ける」とほっとしたのも束の間、運転手から「カードを持っていない人は乗れない」と言われ、「持ってないから、お金を払うわ」と言うと、「お金は受け取れない」と言われました。「じゃあ、初めての人はどうやって乗るのよ!?」「私は、午後一時に教育棟で教育学科長のジェインと約束しているのよ」と戸惑いながら応え、と、「OK、次からは必ずカードを持ってきてね」と言わ

れ、乗せてもらえました。ハイウェイを十分ぐらい走り、ミルズへ着きました。『Welcome to Mills』という新学期の垂れ幕が下がった門を抜け、図書館の脇を通ってキャンパスへ足を踏み入れた瞬間、鮮やかな緑の芝生、そして、その奥に、歴史を感じるヴィクトリア調の建物が目に入りました。「美しい……」これが私のミルズに対する最初の印象でしたが、この印象は時が経つにつれて、より一層、強くなっていきました。

ミルズ大学は我が国では、フェミニストであり、日本国憲法の起草で人権条項の作成に関与したベアテ・シロタ・ゴードンが卒業した大学としても知られ、一八五二年にその前身である女子の専門学校が設立されました。その当時はカリフォルニア大学やスタンフォード大学は存在せず、子どもを大学に通わせたいと思う親は、東海岸までの危険な旅を強いられたそうです。その後、一八八九年にミシシッピ川以西の大学で初めて女子に学士号を出し、一九二六年には西海岸で初めて附属学校をつくつたり、一九七四年には女子大のなかで初めてコンピュー



▲ミルズホール

ターサイエンスの主専攻をつくったりするなど、女子教育のパイオニアとして評価されてきています。また、一九二〇年代には男女共学の大学院ができ、現在およそ五百人の院生が学んでいます。

ジェイン学科長と会う

約束の時間の三十分前に教育棟にあるアニーの部屋に行きました。挨拶や自己紹介をした後、早速、シャトルバスの回数券を買う建物へ案内してくれました。その途中、アニーは私の研究について聞いたり、ミルズのキャンパスの美しさや近所で育った彼女の生い立ちについて話してくれました。ミルズは豊かな自然に囲まれた小高い丘の上に作られた大学で、キャンパスにはユーカリの大木が生い茂り、小川が流れ、時折、いたずらっぽく道を横切るリスを見かけます。ミルズホールと呼ばれる最も古いビクトリア調の建物は息を飲むほどの美しさでした。教育棟に戻り、約束の時間にジェインの研究室に行きました。そこには、ジェインと博士課程のリビーがい

ました。みんなでコーヒーをいただきながら、いろいろなことを話しましたが、私がミルズへ来た目的についてかなり具体的に尋ねられました。彼女らは私に対して具体的にどのようなヘルプがどれだけできるのかについて知りたかったのでしょう。アメリカでは、向こうからこちらの意図や心情を推し量り、気を利かして援助してくれるということは希です。はつきりと意図や要求を主張しない場合は、何も望んでいない、考えていないと解釈されます。これは、二十八年前のアメリカ滞在で私が経験的に学んだことでもあり、アメリカにいる日本人留学生の感想でもあります。

私は、カリフォルニアの保育実践を観察したので典型的な実践の場をいくつか紹介してほしい、保育者養成のシステム、特に保育実践経験をどのように構築していくかを知りたい、また、日本の保育に関してビデオや資料をもってきているのでこちらの先生に見てもらい、意見を聞きたいことなど、いくつかの内容をメモを見せながら説明しました。ジェインは私の話をよく理解してく

れたようで、附属のチルドレンズスクールでの自由な観察や、評価の高い他のスクールの視察ができるようにアレンジしてくれることになりました。

翌日、昼食に誘われ、オークランド港にある有名なシーフードレストランで昼食をご馳走になりました。チルドレンズスクール校長のスザンヌや院生のメーガンと一緒にメニューを見ながら「何がお薦め？」と聞くと「みんなおいしいよ」というので、アボカドのサラダを頼むと日本の二〜三倍はあるような皿にアボカドやゆでたエビの山盛りのサラダが出てきました。とてもおいしいサラダでしたが、食べきれませんでした。食事中は今時の母親についての呆れる話や、水上の「ポートハウス」について話題になりました。ポートハウスはこちらではよく見かけ、メーガンも幼い頃はポートハウスで育ったということでした。私はその時、具体的にイメージすることできませんでした。後にはサウサリートという港町に行った時に、湾沿いにとっても大きくて立派なポートハウス群が静かに浮かんでいるのを見ることができました。



▲教育学科長のジェインと一緒に

レストランから帰ると、ジェインがチルドレンズスクールのなかを案内してくれ、それぞれのクラスの担任の先生や事務の方や主事さんに私を紹介してくれましたが、ゲイル、ジョーなどファーストネームでの紹介は馴染みがないせいも、その時は全然、憶えられませんでした。

チルドレンズスクールでの観察

ミルズ大学附属チルドレンズスクールは一九二六年プレスクールとして設立され、キャンパス内の附属学校としては西海岸で最も古い歴史をもっています。一九八〇年からは乳児保育 (infant-toddler care) が開始され、八一年にキンダー、九一年にキンダーから三年生までの小学校が開始されました。また、プレスクールの混合年齢クラスはミルズの学生の子育てのニーズに応える形で九六年から、小学校四年生、五年生クラスは二〇〇〇年につくられるというように、順次、スクールが拡張されてきました。

発達心理学的な立場から遊び中心の保育を提唱しているジュディスが、アメリカの保育は一般的には行動主義の影響や知的な学習を強調する傾向が強いけれども、その実践は極めて多様で、何が典型かを言いにくいと教えてくれました。アメリカの保育も、ピアジェ、ヴィゴツキー、エリクソンなどの理論の影響、DAP (Developmental Appropriate Practice) の考え方、そして、モンテッソーリやレッジョ・エミアリアの実践などから影響を受けつつ変化し、多様になってきているようです。

このスクールの先生方はみな修士の学位をもっており、話していて、なかなかの理論派だと感じるが多々ありました。児童発達や特別支援教育などを主専攻とする院生や学部生などが常時、スチューデント・ティーチャーとして保育に入っています。チャイルドライフ・スペシャリスト、特殊教育教員、初等教育教員の資格取得の要件としてではなく、「理論と実践」などという授業の一環として保育に入りながら研究を進めたり、また、週に一定時間以上働くと授業料が安くなる

授業料免除システムの一環として保育に入るといふこともあるようでした。

私はここで、年長クラス、年中クラス、乳児クラス、混合年齢クラス、K-1クラスの順で観察していきました。こちらでは保育以前に指導計画を書くといふことがほとんどないらしく、あつても、活動名と教材だけの非常に簡単なものようです。ミルズの先生方も指導以前には指導計画を書かず、ミーティング後にドキュメンテーションを書くといふことでした。私はこれまで多くの保育を観察してきましたが、ここでの観察は難しいと思ひました。担任の環境構成や援助の背景にある意図や感情を指導計画から読み取ることはできず、積極的な対話によつて明らかにしていくしかないからです。

乳児クラス、年少クラスの保育では遊具や教材などは異なつても、私がこれまで日本でみてきた多くの保育と同じように、子どもを「知」の主體的な構成者とみて遊びを中心とし、環境構成を重視しているように感じました。先生方は、また、知的、身体的発達の側面ととも

に、社会情緒的な発達や道徳性の芽生えについて重視し、カリキュラムを構成していると説明してくれました。

保育時間は基本的に午前部と午後部を分けて考えるハーフデイプログラムですが、午前部から午後部へかけて残る子どもがいるので、クラスが合同になつて午後部の保育が行われます。昼休みから午後部担当の先生とスチューデント・ティーチャーと交代し、午前部のスタッフはミーティングに入ります。ミーティング後に担任の先生は教室に戻ります。ミルズでは、スチューデント・ティーチャーと担任との打ち合わせは当日の朝に行われ、保育後の昼休みを利用して一時間程度、スチューデント・ティーチャーとのミーティングが毎日行われ、学生に対するメンタリングが丁寧に行われているようでした。

ミーティングでの体験

年少クラスの観察の後、担任のクリスティンがミーティングに誘ってくれました。ミーティングは担任によつて形式や内容に違いがあるようです。年少クラスの

その日のミーティングは、院生の一人が保育中に疑問に思った事例について記録をあげ、それに基づいて子どもの心情、また、今後、保育者としてどうかかわっていくかなどについて話し合うというものでした。最初にB5判二枚程度に子どもの行動を書いた紙が発表者から配られ、皆が数分で読んだあと、それぞれの意見を交わすというやり方でした。まあ、こちらの院生の発言が活発なこと、活発なこと。内容の全ては聞き取れませんでした。が、私は議論の活発さに圧倒されていました。

すると、クリSTEINがいきなり私に向かって「あなたはこの事例をどう理解するか」「あなただったらどう対応するか」と聞きました。その事例は私がその日の午前中にみていた子どもであるし、子どもの行動の意図や心情なども推論でき、また、よくある事例なので今後のかわりについても話すことがたくさんありましたが、自分が考えていることの半分も表現できないショックやくやしさを体験しました。自分の考えを主張する動機づけも低いし、構えもなかったのでしょうか。不意をつかれ

て焦ってしまったようです。こちらでは、自分の考えを主張するのが普通であり、主張できなければ何も考えていない、あるいはわからないと評価されます。子どもたちは幼い頃から、何でもいいからとにかく自分の考えを主張することを学んでいきます。現地校に通うある日本人の高校生の話では、ペーパー試験の他にレポート、発言回数、態度、欠席数などを総合して成績がつけられ、要望があれば、いつでもデータベースから情報を開示し、説明してくれるそうです。その高校生は、授業中は何でもいいから発言しようといつも考えていると言っていました。

こちらに來た直後、異文化間コミュニケーションで大事なものは「互いの文化に開かれた柔軟な心と、通じ合えるという樂觀さ」などと感じましたが、そんな甘い考えは渡米後一か月で打ち砕かれ、「主張しよう、通じ合おうとする勇ましさ！」なのではないかと思うようになりました。

(東京学芸大学)